

第三期の大学にみる中高年教育の可能性

——英仏モデルの比較を通して——

中 川 恵里子*

The Possibility of Education for Older Adults in the Practices of U3A —— Based on the Comparison of English and French Models ——

Eriko NAKAGAWA

Why do we segregate older adults from younger in the adult-education? What differences are there in education for older adults and younger ones? In this paper, we try to reaffirm the necessity and possibility of the education for older adults through the analysis of the process which international movements of adult-education, U3A, have remarkably developed all over the world. One of the reason why I notes NPO as education systems is that they seem to be flexible to offer learning and training chances to older adults, and the other is that they sensitively reflect the consciousness of people.

Two substantially different approaches—the original French approach and the self-help approach in England—have become the dominant U3A models adopted by other countries. First, we will introduce the idea of the third age. Then we compare French U3A models, which co-operate with formal universities, with English ones which I have already introduced in another paper. The view points of the analysis are “experience” and “plurality”.

- 目 次
- はじめに
- I 第三期という概念とフランス U3A
- A 第三期という概念の登場
- B フランス U3A 発展の背景
- C 諸機能をめぐる議論と実際
- D 新しい動向
- II 英国 U3A
- A 英国 U3A 発展の背景
- B 自助のアプローチとその展開
- C ケンブリッジ U3A
- D 非営利組織としての自立と支援
- E 多様化とネットワーク化へ
- III 英仏 U3A の比較を通して
- A 高齢者対象の教育の展開

- B 民間非営利組織としての可能性
- C 高齢者教育としての議論
- D 高齢者教育の方法として
- 多元性と課題

はじめに

平均寿命の伸びに伴い、介護などが社会問題化する一方で、引退後の元気な時期をどう創っていくべきかが、個人の、また、社会全体の重要な課題になりつつある。

我が国では、このような課題に対応すべく、70年代に登場した「生きがい」対策の影響のもとで、教養教育からボランティア等の社会参加活動に至るまで、寿大学や高齢者大学などと呼ばれる高齢者を対象とした教育・文化事業が福祉や社会教育行政によって活発に展開されてきた。戦後の我が国における高齢者を対象とした教育実践は、50年代における老人クラブや老人学級等の福祉行政による弱者保護的色彩をもつ事業にはじまり、このよ

* 明治学院大学非常勤講師

うに旧くから高齢者を対象として分離し、制度として確立してきたという特徴をもつ。

しかしながら、近年における中高年の高学歴化や嗜好の多様化に伴い、生きがい対策の対象としてでなく、自分たち自身で学習・文化活動を組織し、自治体などと協力しつつ、高齢化社会の課題に対処していこうとする自助的なグループ・団体の動きがでてきている。一方、大学や大学院レベルの教育を求め、正規の学生となり、若い学生と共に学ぶことを選ぶ中高年も増加しつつある。

以上のように、多様化しつつある高齢者の学習や社会参加の傾向に対し、高齢者教育を考える際にとりわけ問題にされていた、若い時代の教育の不足を補うという教育的補償の問題や高齢期の学習能力の低下に関する認知的問題など、近年の研究の成果によって、より若い成人との違いがそれほど問題でないことが明らかにされつつある今日、高齢者のみを対象とした教育がなぜ必要であり、どのような特質をもつのか、また、それは、どのような内容や方法、組織の在り方が相応しいのかを改めて実践面から問い返す必要があるのではないだろうか。

このような問題を考察する手掛かりとして、筆者は、高齢者を対象とした教育が、どのような背景のもとで組織化され、展開してきたのかを社会・文化、及び教育制度的背景の中で分析することを試みている。その顕著な例として、日本においては生きがい政策が展開した70年代にフランスでおこり、現在、世界各地で急激に発展している引退した人々の教育・文化活動を目的とする国際的成人教育運動、「第三期の大学（Universities of the Third Age, 以下U3Aとする）」の理念を共有する非営利組織の動向に注目している。そして、高齢者自身が自主運営し、教えるという英国独自の自助（セルフヘルプ）の様式で発展し、国際的に注目を集めている英国U3Aが成人教育から成立してきた過程を分析した。（拙稿「イギリスの第三期の大学」）

筆者が、成人教育機関としての非営利組織に注目する理由は、社会や文化、教育制度的背景の中でのその実践的展開過程そのものが、高齢層の学習・文化活動への要求や意識のみならず、高齢者やその教育に対する社会的意識を敏感に映し出すメディアであると同時に、非営利組織という形態が、高齢者の学習・文化活動や社会参加の機会を提供する一方法として、また、フォーマルな教育制度の在り方に示唆を与えるものとして、多様な可能性をもつのではないかと考えるからである。

本論では、英国U3Aについての筆者による考察結果をふまえつつ、U3Aの理念が生まれたフランスにおける動向と比較検討するという方法を試みる。このフランスにおける大学提携型のオリジナルモデルと、第三期

の人々自身による自助を特徴とする英国モデルという二つの対照的なアプローチは、U3Aの代表的モデルとして他国から認められているものであり、その他の国々では、これら親モデルの要素のいくつかを合併しつつ各国の状況にあう形が進化してきた¹⁾とされている。

英国U3Aにおける分析では、第三期の人々の経験を活用する自助の方法による自立的な運営が、従来の英国成人教育の伝統的方法とは異なる参加型の高齢者教育の可能性を拓いてきただけでなく、非営利組織の強力な経営基盤として機能し、英国における80年代以降のU3Aの急激な発展を支える要因となってきたことを見てきたが、大学提携型のフランスモデルではどうであろうか。また、このような運営上の違いを超えて、第三期の教育として共通するものは何であろうか。

本論では、まずI章で、U3Aの理念的基盤である第三期とは何かを明確にしつつ、フランスにおけるU3Aの実践的展開過程を明らかにする。II章では、筆者による従来の分析結果を交え、英国における展開過程を再考する。III章では、I、II章の結果を用い、時代的流れ、文化、社会、制度的文脈の中で、「第三期の大学」という共通の理念をもつ教育がどのように組織化され、実践的に展開したのかについて、両国の比較分析を試みつつ、上述した問題を考察する。なお、U3Aの急激な発展を受け、英国では、Carnegie UK Trustが1991～3年に初の全国調査²⁾を実施している。

I 「第三期」という概念とフランスU3A

A 「第三期」という概念の登場

U3Aの理論的根拠をなす第三期とは何であろうか。思春期という概念が19世紀後半に出現したように、第三期という概念は、20世紀後半にフランスで登場した。1975年に設立されたU3A国際協会（Association of Universities of the Third Age: AUTA）の二代目会長Mayenceは、「第三期とは、職業への従事をやめ、全面的に独立を楽しむ時代である」と定義し、単に退職後というだけでなく、この時期はそれ自体確立されるべき全く新しい時期であり、他者から孤立する第四期と区別することができるが、第三期によって第四期への移行を調節できることを強調した³⁾。

また、英国モデルの理論的基盤を作ったLaslett（1989）も、「強制的退職と年金、寿命の伸び等が50年代以降、多くの産業国で、第三期と呼ばれる比較的新しい現象、つまり、健康で活動的で自己実現を追求できる時期を生んだが、その到来や依存と老衰の時期である第四期への移行は、年齢によらず個別的なものである⁴⁾と、第三期の過ごし方の重要性を強調する。

それでは、どのように第三期をすごすことが第三期を維持し、第四期への移行を遅らせるのであろうか。

学習・文化活動などの知的活動が認知的機能の維持に与える影響に関しては、教育のエンパワメント的性格が高齢者の依存性を遅らせたり、減少させたりする可能性をもつ事 (Groombridge, 英)⁵⁾、知的興味を維持することが認知的機能を維持・増進させる可能性をもつ事 (Macneil&Teague, 米)⁶⁾、選択しうる知識の幅が広いほど、自立性が維持されやすい事⁷⁾などが議論されているものの、その効果について明白な結果は出されていない。このように認知的裏付けを欠くまま、高齢期の教育は今や実践の方が先行し、その最も成功している国際的事例がU3Aであるといわれている。

B フランスU3A発展の背景

U3Aのような一つの理念が進展する政策的環境は、まず、フランスで確立された。1968年に、正規の大学に対し、今まで以上にコミュニティ教育を提供するよう求める法律⁸⁾が出されたのである。その背景には、60年代の大学紛争を契機に高等教育の改革を求める動きがあり、教育全体の構造の作り直しのために提示された事項を支援する責任を既成の大学に担わせようという意図があった。それ以前には成人教育、特に高齢者教育そのものに関心をもたれることはあまりなく、仕事や家庭での社会的責任を終えることはしばしば善を終えることを意味し、高齢者は惨めな者として描かれることが多かった⁹⁾といわれる。したがって、大学で高齢者にふさわしい講義を実施することは、すぐさま歓迎される状況ではなかったのである。

1 トゥールーズでの誕生

フランスU3Aは、1972年、トゥールーズ社会科学大学 (Toulouse Universities of Social Sciences) の国際法教授であり、高齢者の活力に関する社会医学の調査研究に関心をもつ Vellas が引退者に対してサマースクールを開催したことに始まる。彼が用意した講義、コンサート、案内付き見学会、文化的諸活動等のプログラムは、多くの高齢市民に非常に熱心に受け入れられ、一年間のプログラムへと発展した。そして、周辺の都市でもサテライトプログラムが開催されるようになる。当時の試みについて Vellas は、「大学がその資源を用いて、お年寄りの生活状態を改善するために何ができるかを見つけることが目的でした。」と、高齢者のニーズに関する経験的なアプローチとしての調査研究活動の一環でもあったことを語っている¹⁰⁾。

彼の実践がラジオやテレビで報道されることにより、

U3Aの考え方はフランス国内外に広まり、1975年までにはベルギー、スイス、ポーランド、イタリア、スペイン、合衆国、カナダのケベック州でU3Aのプログラムが開催されるに至る。同年、早くもこの新たな概念を内包する活動について国際討論会が開かれ、U3A国際協会 (IAUTA) が設立された。以降、毎年恒例の会議が国際的に開催されている。しかしながら、国内組織であるU3Aフランス国内ユニオン (UFUTA) がパリの退職教員クラブ、MGENに事務所を開いたのは1980年になってからである。その後、1983年には約130のセンターを有する組織として成長していく¹¹⁾。

このように、フランスU3Aは地方を中心に起きてきただけでなく、当初から国際的傾向をもっていた。同時に、各センターはその地域の設立物として固有のテーマを有しており、これは、フランスの公教育が中央集権的性格をもつものに対し、「教育制度に一石を投じるような」性格をもっていた¹²⁾と評されている。

2 地域的发展と大学との関係

オリジナルなモデルは大学の資源を高齢者に開放する形で発展した¹³⁾が、70年代終わりから異なるアプローチが発達しはじめた。例えば、大学の一構成要素として分離している例、行政組織である高齢者の福祉部局と提携する例、自治体が直接創設する例、グルノーブルのように地域の様々な大学センターにU3Aが立ち上げたいと企画するプログラムをもちかけて交渉するという自発的組織として独立している例、パリのナンテールのように生涯教育研究所と提携する例など、地域に即して多様な形式が出てきている。しかし、どの形態にせよ、共通しているのは、内容的に大学レベルのアカデミックな水準が追求されていることだ¹⁴⁾。このことは、フランス国内ユニオンが近年に至るまで、大学と各支部との直接の提携を主張してきたことや、1983年にパリで開催された退職者及び高齢者の国内会議において、「大学という名前の信頼性を保つために、大学学部の教師の割合を増加することが望ましい」と提起された例¹⁵⁾などからも明らかである。

このように大学との関係や大学レベルの教育が強調される背景には、高等教育制度に基づく地域と大学との関係があげられるであろう。フランスではほとんどが国立大学であり、1968年、高等教育改革のための法律が出されて以来、各大学はその地域の大学として高等教育の責任を担う役目を担ってきた¹⁶⁾。同様に、地域の高齢者教育の責任も大学が担う形が形成されてきたといえる。大学側にとっても、地域サービスと同時に、高齢社会に向けた教育プログラムの開発という研究事業に第三期の

人々の参加が得られるという利点もあったのである。

財政的基盤についても、その資源を利用するという意味で大学依存度が高い。その他、メンバーからの授業料や寄付、地方行政からの直接の助成などが主な資金源である。しかし、経済情勢の悪化から、大学がスポンサー役から手を引き始め、利用者負担が増加する傾向が指摘されている¹⁷⁾。

C 諸機能をめぐる議論と実際

トゥルーズU3Aの女性参加者は、「第三期の理念は非常に良いと思います。なぜなら、歳をとると、外に出かけ、起こっていることを観てみようとする努力を絶やさぬよう努めなくてはならないからです。これは、健康と知性のために絶対必要です。」と、U3Aが身体的・知的刺激を提供する場であることを強調する。また、男性の一人は、「クラスに出席することはとても大切です。なぜなら、ドアから中に入ると、煩わしいことをすべて忘れ、快適で和やかな気分になれるからです。そこでは友人や共感を見出すことができます。人との触れ合いは我々の年齢ではとても大切なのです¹⁸⁾。」と、クラスへの参加そのものに意味があるという。それでは、U3Aがもたらす教育的機能は、どのように議論されているのであろうか。グルノーブルU3Aの創始者、Filibert グルノーブル大学教授は、以下の事項をあげている¹⁹⁾。

①引退した人々の社会参加の促進

U3Aは孤立しがちな引退者の社会参加を助ける。

②知識の探求や知的能力を発展させる楽しみ

U3Aは知識の提供や探求そのものを重視する。

③既存の教育制度を変える可能性

成人教育を活性化することによって、学習者に自主権を与えないフランスの伝統的教育方法に影響を与える。

④自分の人生の解釈し直しと新たな方向づけ

人生の統一性や意味を再生産し、人生と共通の歴史を解釈し直す作業はコミュニティへの貢献となる。

また、トゥルーズのVellas教授は、認知的、身体的、そして社会的発達の促進を指摘する。ここでは、両者に共通する社会参加の促進と知的刺激の提供、および、教育全体を変える機能について、その実際をみていきたい。

1 社会参加と教育への影響

U3Aは引退者なら誰でも参加できるが、実際、どのような人々が参加しているのであろうか。

U3Aが大学の一部であるアミンズで、四年以上の在籍者を調査した²⁰⁾ところ、一人暮らしの女性の参加が多く、その年齢は50-86歳と幅広い。また、農業従事者やブルーカラーが少なく、夫婦そろっての参加が多いなど

の結果が得られている。また、最も参加しやすいタイプは、中等教育を受けているが、知的・教育的ゴールを達成する機会をもたなかったことに不満を抱いている人々であり、最も参加しにくいタイプは、若い時代に教育システムによって学習への興味を失った人々、もしくは、非常に高い教育への達成感をもつ人々であるとされている。以上の報告から、孤立しがちな者の社会参加も可能にしているが、若い時代に教育的恩恵の少なかった人々に対する教育的補償という点では限界も存在していることがわかる。

参加の動機については、①知的・文化的刺激を求めて、②社会参加のため、③学生という社会的地位が得られることがあげられ、欠席がほとんどなく、学習への参加を仕事のひとつと捉える傾向がみられるなど、知的刺激と同時に、社会的身分や居場所を提供する機能が求められているといえよう。また、U3Aへの参加がきっかけとなり外部の活動へも興味を発展させていく例や友人が増え生活が改善されたと報告する者が多いことから、U3Aが人間関係や社会参加への意欲そのものを活性化する機能をもつことが考えられる。

一方、第三期の人々のみを対象にすることの問題に関して、トゥルーズU3Aでは、身体的プログラムなど、第三期の人々にはその年齢に必要な教育内容があり、同世代という楽しさがあるだけでなく、例えば、語学を習得する際、若い人々は本能的に学ぶのに対して、高齢者は文法から学ぶように、年齢の補償にはより合理的で組織化された方法が必要であることが指摘され、第三期の人々のみを対象にする利点が強調されているのである。また、高齢学生から得られるフィードバックが大学から派遣された若い先生たちを通し、大学教育にも影響を与える可能性が議論されるなど、U3Aが高等教育の在り方を変えていくのではないかと期待が存在する²¹⁾。しかし、このような期待にも関わらず、退職教員の55%が入会するパリの退職教員クラブ、MGENでは、先生と高齢学生とのクラス外交流に関する企画を、高齢学生側がほとんど利用していないという報告もある。

2 知的刺激の提供

フランスU3Aでは大学レベルのアカデミズムが追求されるというものの、学位や資格は授与されず、入学に際してどんな資格も要求されない。提供される内容は、歴史、語学、身体・健康関係プログラム、芸術等が多く、中でも語学コースは人気が高い。大学の教員であるトゥルーズU3Aの現代語学の講師は、「語学コースは、記憶を訓練する規則的な機会を提供するだけでなく、第三期の人々が外国の文化に触れる機会を提供するという

意味で、知的刺激と実践的な訓練が結合した優れたプログラムである²³⁾と評価する。退職教員クラブ、MGENでも、語学は同様に人気がある。ここでは、知識の取得、つまり学習のための学習が高度に価値づけられ、取得した知識を実践や社会的活動に応用するプログラムはほとんどみあたらない²³⁾。

退職教員たちは高い教育的達成を望む一方で、資格の取得や試験にはほとんど興味を示さず、職業的抑圧から開放され、好きな事を自由に学べる幸福感や豊かさの感覚が報告されている²⁴⁾。このように、フランスU3Aでは、知識を学ぶことそれ自体が重視される傾向があるが、その背景にはどのような考え方が存在するのだろうか。

グルノーブル第三期の大学のPhilibertは、「実践上必要なものとして蓄積された知識や経験、自己の人生、及びその共通の歴史を新たな知識によって解釈し直す作業は、人間が人間として生きる道を見つけることが難しい今日、彼らのコミュニティへの、また人間コミュニティ全体への顕著な貢献となりうる²⁵⁾」と、人生や経験の再解釈のためであり、そのことが、第三期の人々だけでなく、社会全体、また人類全体の今後の道筋に示唆を与えるものとして意味のあることであると、前述した④の機能を強調するのである。

D 新しい動向

80年代に入り、運動の勢いが和らいできると、対象を第三期の人々に限定せず、地域のより幅広い対象者に対して教育を補償していくことが目指されはじめた。例えば、主婦、中退者、失業者、身体障害者、若者、大学生などにもコースが拡大され、その時間帯も第三期の人々のみを対象としていた頃は昼であったのがフリータイム制になり、名称にも変化がみられる。例えば、ナンシーでは、「第三期と余暇の大学」、サンテティエンヌでは、「第三期とみんなのための大学」、リヨンでは、「あらゆる年齢の大学」、グルノーブルでは、「世代間相互の大学」、ミュルーズでは、「第三期の大衆大学」などである。

また、経済情勢の悪化から、大学がスポンサー役から手を引き始めたり、利用者負担を増すかわりに、提供する内容や方法を変化させるという現象がみられる。例えば、形式も、公開講座、大学の講座へのアクセス、契約コース、学習グループ、ワークショップ、遠足や身体健康プログラムなど多様化され、従来の楽しみのための学習から、仕事の技術を取得する学習へと重心を移行させる傾向がみられる。しかし、高齢者の参加は、依然として、人文科学や芸術などの教養教育が中心である²⁶⁾。

このように、フランスU3Aは、正規の大学と提携する形で、大学レベルの知的教養教育を第三期の人々に

提供する形で発展したが、これは、高齢者へのサービスと同時に、高等教育改革やコミュニティサービス推進の一環としての役割をもっていたのである。高齢者への教育提供組織が、このように成立、独立し、その後、コミュニティ教育機関としてすべての人々の教育機会の補償を掲げ、一般化していくのも、地域の高等教育や福祉全体の向上をめざす行政政策の一翼をになった大学から生まれたという背景を持っていたからであろう。次章は、英国U3Aの発展過程を振り返り、とくに非営利組織として、第三期の人々による自主的運営がどのように組織され、第三期の人々自身の成長に繋がっていったのかを補足していきたい。

II 英国の第三期の大学

英国において最初のU3Aがケンブリッジに設立されたのは、フランスより約10年遅く1981年のことであった。ヨーロッパ大陸におけるU3Aの動向が伝わりつつも英国で遅れた理由は、成人教育制度が発達していたことと、エリート主義的体質をもつ大学の伝統的在り方が関係しているといわれる。設立に際して、フランスU3Aの関係者、Filibertの関与も有ったものの、主に英国の成人教育関係者が中心になり、既存の大学や成人教育の高齢者教育に対する限界を補う形で、英国独自のモデルが考案された。これが第三期の人々自身が教え、自主運営する自助（セルフヘルプ）形態の英国モデルであり、80年代以降、急激に発展し、1993年には、イングランド、スコットランド、ウェールズ、そして北アイルランドをあわせると約240、メンバーは3万人を超えた²⁷⁾。

A 英国U3Aの発展の背景

このような急激な発展の背景には、高齢人口の増加や早期退職の拡大に伴い、若く元気な引退者が増加するという現象が生じたことがあげられる。それに伴い、WEA（労働者教育協会）やLEA（地方教育当局）等の成人教育機関も参加者の高齢化に対応すべく方針を修正したり、産業界では退職準備教育を実施する動きがみられたが、全体として高齢者への公的教育サービスの立ち遅れが指摘されている。OU（大学開放）の基盤をつくった成人教育関係者 Raslet は、20年代の学校教育義務年限のために、高齢者の教育事情が悪く、成人教育機関への参加もわずかであることを指摘し、高齢者の教育的権利を主張すると同時に、WEAやOU等の成人教育機関が高齢者の受け入れに関して制度的限界をもつことを明らかにした²⁸⁾。そして、「第三期の人々にとって、大学と同様のアカデミックなものは不快と言わないまでも不適切であるらしい。」と、階級問題を内在する英国の高齢者

にふさわしい方法や内容があると考えたのである。そして、Midwinterらと共に、70年代に発達したコミュニティ教育や近年活発化しているセルフヘルプ団体のノンフォーマルな方法²⁹⁾を応用し、第三期の人々自身が地域資源を利用し自主運営する、自助形態のモデルを提起した。それ以後、英国U3Aの理念や政策上の基礎となってきた「ケンブリッジU3Aの目的、原理、施設の形態³⁰⁾」がそれである。誰もが教え、運営するというこの理念は、教授方式の教育的伝統の強い80年代はじめの英国において革新的なものであり、最初のU3Aがケンブリッジに設立されることが報道された時、大きな関心が寄せられたのである³¹⁾。

このように、英国では、高等教育に対する高齢者層のネガティブな意識や無関心、従来のフォーマルな成人教育機関の選択の幅の少ない教授スタイルの形態、授業料の負担など、成人教育機関の高齢者への教育提供における限界が認識され、それらを改善すべく、成人教育関係者らによって英国独自の形態が考案され、発展してきた。

B 自助のアプローチとその展開

自助のアプローチでは、教える者と教えられる者との間の区別を取り払い、メンバーは学習者であると同時に先生になるし、研究活動に従事することもある。この理念は、引退した第三期の人々の経験や知識に基づくものである。考案者のRaslet自身、「英国モデルは非常に理想主義的であったが、この理想主義は、80年代という沈滞した時代に人々にアピールするには有効であった。」と振り返る。しかし、近年の発展は、当初のペーパープロジェクトが具現化された結果というより、それを基礎としつつも、地域にあった多様な形が生みだされたからだと分析する³²⁾。

英国のU3Aに関する分析は、Rasletが教育機会の補償や高齢者の教育的権利という側面から、Allmann³³⁾が自助のアプローチについて成人の学習プロセスという視点から、Radcliffe³⁴⁾が運動論の視点から、RennieとYoung³⁵⁾がコミュニティ教育と相互的援助における感情移入の観点からそれぞれ議論を展開しているが、高齢者教育の権利を追求する団体、FREEのコーディネーター、Nortonによると、これらの議論に一貫して流れるテーマは「自己決定」であるという。彼女は80年代における四つのケーススタディをもとに、自助モデルがどのように実践的に展開していったのかについて、以下の六つの発展段階をあげながら、全国レベルでの分析を試みている³⁶⁾。

- ①自発的なイニシアティブ形成の段階
- ②公開の集会を開催し、地域の意見や理解を求める段階

- ③理論を実践化するためワーキンググループを作る段階
- ④学習グループによる主流プログラム作成の段階
- ⑤メンバーのニーズを反映し多様化が促進する段階
- ⑥ネットワーク化と全国組織発展の段階

このような分析から、成人教育関係者が中核となりながらも、いかに苦労や失敗を重ねつつ、第三期の人々の参加や自己決定力が引き出され、自助的組織運営に結び付けられていったかが推察されよう。次に、Nortonの分類では、五番目の発展段階にあたるケンブリッジU3Aの80年代における展開をみていきたい。なお、ケンブリッジU3Aは、1981年に英国で初めて設立されたU3Aであり、英国U3Aの「基本形」とされながら、その後、各地での発展に影響を与えてきた。

C ケンブリッジU3A

製造業での重役のポストを早期退職後、ケンブリッジU3Aの研究局長を勤めたFutermanは、自らも第三期にあるが、その発展のプロセスを次のように報告している³⁷⁾。

自助セミナーが実行可能か否かについての世論の反応をみるための試みであるイースタースクールが1981年に開催され、約75人の参加者の意見をもとに、自助施設へのニーズが確認され、委員会が組織されるに至る。そして以下のようなプログラムが実施された。

- ①基礎講座—ある関心事の学習の基礎となる毎週の講義と其れに関する連続セミナーを組み合わせた企画
- ②多様なテーマを扱う毎週のプログラム—美術史、政治学、音楽、英文学、彫刻、絵画クラス
- ③言語ワークショップ、—北京語から古代ギリシャ語まで多くの言語をカバーするが、人気の高いヨーロッパの言語に関しては能力別クラスが編成される。
- ④調査研究分科グループによる調査—「テレビに描かれる高齢者のイメージ」についての研究報告は出版されている。また、調査グループは独自のモニタリングを使い、メディア関連研究を企画。

このようなプログラムに加え、ニュースレターを定着させることにより、メンバーの知的訓練の機会やコミュニケーションの促進を図ったり、死別やその他の困難を抱えるメンバーを支える「ピ・フレンジング・サービス」を提供するシステムが構築され、劇場訪問旅行やクリスマスディナーなどの行事を担当する社会活動グループやスポーツ活動も活発化しつつある。財政は、5～20ポンドのメンバーの年会費が基本収入であり、募金、バザーなどの収益も事業拡大と事務所やスタッフの確保をめざし、ファンドとして管理されている。

このように、ケンブリッジは文化・教育的にとりわけ

恵まれた地域であり、講師を依頼しやすく、知的刺激を享受する環境が整っているといえるが、それらが多様な社会的活動に発展、応用されていったという点に、第三期の人々自身が決定できる自主的運営の柔軟さと強みがみられる。しかしながら、その発展への道のりは決して平坦ではなく、試行錯誤の連続であったようだ。しかし、そのような経験を共有することによって、第三期の人々の中に自分達の組織を発展させていこうという自主性や自己決定力が培われていったのである。

この展開を Futerman は次のように表現している³⁸⁾。

「市内全域の様々な場所で、片手に満たないほどのボランティアの力で運営されている現在のプログラムは、精神分裂病を超えて、多重精神病と呼べるべきものであるかもしれない。この奇跡が、人員面でも収容設備面でも恒久に解決をみだせる時がくるまで、もう少し続けてくれることをただ祈るばかりである。このことが常に討論的となっている。この複雑なシステムはいつも奇跡のようにみえる。活動はすべてボランティアによって準備されるのだ。実は、他組織で集めた経験を参考に、計画準備チャートなるものが作られている。私はそれを前例の存在しない U3A にとり入れられないかと考えてきた。しかし、一方で、メンバーの善意という大きな蓄えもある。そうした善意が決断力を発揮してきたのだ。そして、多分に即興性と想像力を用いて、私たちは U3A を当初構想していた方針に沿って、何とか運営することができた。」

このように、事業が拡大されるに至り、複雑な運営システムやマネジメントを支える有給スタッフ、特に、秘書、教室の手配や機器の操作をするテクニカルアシスタント、チューターとセミナーの連絡を図り、クラスや時間割等を監督する教育分野の経験をもつ管理者へのニーズが強く指摘されはじめている³⁹⁾。つまり、自助といえども、専門スタッフの必要性が組織的發展とともに生じてきたのである。

D 非営利組織としての自立と支援⁴⁰⁾

個々の支部が組織化される過程をみてきたが、全国組織である第三期トラストも各支部の成立を支援してきた。1983年、第三期トラストは慈善委員会 (Charity Commissioners) にチャリティ団体として登録された。その目的は、「教育の促進、特に中高年むけの教育」とされている。第三期トラストは選挙による代表者からなる全国委員会のメンバーと各支部の代表を含む評議委員会によって管理され、ロンドンに事務所をもつ。このような全国組織をもつものの、各支部は自由な名称をもつことができ、自治的に運営されている。

各支部もまた、チャリティ団体としての資格をもち、地域施設を無料で使用する等の支援を受けているが、公共的助成を訴えるところもある。例えば、積極的に支援を受けているロンドン U3A の場合、ボランティア & クリスマン・サービス・チャリティから寄付を受け、ロンドン大学構外教育部に事務所を置き、北ロンドンポリテクニクから管理スタッフとボランティアを提供されている。外部からの支援に頼らない姿勢を掲げる支部もあるが、どのくらいの規模なら自給的経営が成立するのかについても、メンバー数が20~500と多様な例が存在し、一般的な基準はない。しかしながら、自助の形態は、通常、大きな負担である講師料がないため、慎ましやかな自給的運営が可能なのである。

E 多様化とネットワーク化へ

近年における展開は、Norton による分類では5、6段階目に相当する多様化とネットワーク化という言葉で特徴づけられよう。地域に則した多様な形態と支部間をつなぐ緩やかな協力関係の構築は、90年代における英国での急激な発展を支える大きな要因となってきた。

しかし、その人気の一般的な要因については、会費が安い、コミュニティホールや図書館、メンバー宅などを利用するのでアクセスし易く親しみやすい、カリキュラムや教え方などが多様性、柔軟性に富んでいる等があげられている。また、地域の他の U3A と共同開催される講演会などが増加する傾向にあり、U3A ヨークでは「退職後の積極的健康維持について」「歳を重ねることの哲学的見方」等のシリーズが人気をよんでいる⁴¹⁾。

また、聞き取り調査⁴²⁾によると、参加者は一人暮らしの女性が多く、男性ではチューターとしての基盤をもつキャリアに恵まれた男性が多いこと、また、同時に成人教育機関や他の活動にも参加する多忙な人が多いことが報告されている。このように、90年代における参加者は、多様な学習・社会参加活動の選択肢の一つとして U3A を利用する傾向をもち、80年代始めの英国 U3A 設立当初の目的であった、成人教育機関への参加が困難な者の参加や若い時代の教育の不足を補償する役割が、変化しつつあるといえる。

このような第三期の人々の学習活動の多様化傾向に対応すべく、U3A も、個人の選択しうる科目の幅を拡大し、各分野の専門性を高めるために、国内外における U3A 間のネットワーク化を促進している。例えば、全国組織である第三期トラストは、語学、科学、芸術、オーラルヒストリー、テクノロジーの分野において、全国科目ネットワークを形成している。また、第三期のメンバーの言語的スキルを NPO 組織のために使おうと試

みる通訳・翻訳者ネットワークや、地理的分布を活用し高齢者のための情報データベース作りを目指すネットワークにみられるように、U3Aの専門化やネットワーク化によって、地域を超えたサービスをめざすベンチャープロジェクトが出てきている。この種の活動には、高学歴化しつつある第三期の人々の経験を有効活用するだけでなく、同時に高齢者のイメージや地位を高める効果が期待されている⁴³⁾。

今後の課題としては、学位等をもち主体的に情報を集め、要求を明示できる高齢者が増えたことから、エイジングやU3A自体の研究にメンバー自身に関わることが期待されている他、第四期の人々の参加の問題、世代相互の問題、マルチメディアを利用した遠隔地教育の可能性等の議論が出てきている⁴⁴⁾。このような多様な課題を抱えるものの、自助形態の強みは、社会的変化に対応しつつ運営を変えていける柔軟性をもつことであろう。

Ⅲ 英・仏モデルの比較を通して

フランスでは大学主導型が、英国では自助の形態が考案され発達したが、その後15年以上にわたる社会・経済的变化を経験する中で、両者がたどった経過を踏まえつつ、両モデルがそれぞれ高齢者教育組織としてどのような可能性をもつのか、その背景にはどのような考え方や議論が存在するのか、民間非営利組織として大学提携型と自助型のもつ可能性等について比較・検討を試みる。

A 高齢者対象の教育の展開

フランスU3Aは、地域の高等教育や福祉の改革をめざす政策的意図を担う大学から高齢者への教育提供組織が生まれ、その後、経済政策的合理化に伴い、すべての人々を対象にしたコミュニティ教育組織として一般化していくという、民間非営利組織といえども行政政策の間接的影響のもとで展開してきた。そして、その運動の中心となったのは、主に大学関係者であった。一方、英国U3Aは、従来の成人教育機関が高齢者への教育提供において限界をもつという認識のもとに、成人教育関係者が中核となり、第三期の人々による自立的運営による高齢者専門組織として発展してきた。すなわち、フランスU3Aは高齢者対象の教育の分離→一般化の過程を、英国の場合は高齢者対象の教育の分離→専門化という対照的な経過をたどっている。この経過を高齢者のみを対象にすることの有効性や世代間相互の関係の構築という視点からみてみたい。

フランスの場合は、当初、高齢者教育のプログラム開発という研究目的をもち、高齢者独自の教育課題と方法が存在するという主張のもとで専門組織が設立・発展し

てきたが、世代間交流の促進と経済的合理化のために、地域教育組織として一般大衆むけの施設となっていたのである。ここにおいて、世代間交流は、他世代と学習の場を統合することによって目差されたのであった。

一方、英国U3Aの場合は、Rasletの言葉をかりると、「U3Aは第三期の人々を若い人々から区別することによって彼らに社会的立場を提供しているが、それは若い人々とより密接な共同と相互関係を構築するための社会的立場である」⁴⁵⁾と、区別することによって世代間相互の関係が社会的に促進できることを強調している。実際、英国U3Aが支部間ネットワークを促進させることにより、第三期の人々個々人の多様化する学習要求に応えるだけでなく、高齢者ならではの視点や立場を活かし、地域社会全体へのサービスに挑戦し始めている近年の動向は、この主張を裏付けているといえよう。

B 民間非営利組織としての可能性

それでは、民間非営利という組織形態はどのような高齢者教育への可能性をもつのであろうか。英仏共に、基本的には民間非営利という立場をとり、地域に則した多様な形態を特徴とするが、80年代以降の経済的状況の変化に対しては、大学や行政組織との提携によって成立しているフランスU3Aより、自助形態の英国U3Aのほうが、地域に適したレベルで柔軟に対応してきたといえよう。もっとも、フランスの場合、中央集権的な体質をもつフランス教育制度に一石を投じるのではないかという期待を担っていたU3Aではあるが、それらにも大学レベルの知的水準が求められたという点に、フランスの伝統とも呼べるべき姿勢が伺える。また、自助の形態では、運営や教えることを通して自らの経験を活用することによって、社会的役割や自己表現の機会が創出されているが、同時に、そのような活動が経営資源として活かされるというフィードバックが形成されているところに、非営利組織としての経営的強さが認められるのである。とかく、外部からの支援が社会・経済的情勢の変化を受け易い高齢者教育において、英国モデルは一つの組織の在り方を提起しているといえよう。実際、国際的にも自助型U3Aは、ポルトガル、スペイン、ニュージーランド、オーストラリアなどで、近年、急速に発展している⁴⁶⁾。

C 高齢者教育としての議論

このような自助のアプローチの学習的意味については、80年代にAllmannが社会心理学の立場から、成人の思考のプロセスにおける経験の役割の分析をもとに、学習プロセスだけでなくグループプロセスをマネジメントす

る重要性を説き、自己決定型学習の共同的意味について考察している。また、90年代には Withnall と Percy が、「高齢者教育の特殊性は彼らの有する経験にあり、高齢者においては、学習へと導かれる経験は何層にも重なり融通性をもつ。高齢者は、自分の経験と折り合いをつけるべく、経験を解釈し直し、経験から意味を引き出すことによって過去や未来に新たな視点を開拓する必要があるが、それは知識の取得によってだけでなく、他者と経験を共有したり、経験を資源として活用する日常的実践の中で可能となる。」と、高齢者の重層的な経験を引き出し、社会的実践を通して共有していくことの重要性を明らかにしつつ、自助と相互関係の原理¹⁷⁾を導いている。また、エイジ・コンサーン・イングランドは、「高齢者がある程度自主管理し、意思決定することによって学習が自分のものであるという感覚をもつことが特に重要である」⁴⁸⁾と自己決定型学習が高齢者個人に齎す意識について言及している。以上のように、自助の形態によって、高齢者個人の参加意識が高められると同時に、個人の蓄積した重層的な経験を社会的に共有しあうことによって、参加者個々人の経験が意味づけられ、人生に統合的指針が与えられるというのである。つまり、高齢者の多様で重層的な経験の蓄積が、自助と相互関係によって、多元的⁴⁹⁾に統合されていくと考えられているといえよう。

一方、フランスでは、80年代にグルノーブル U3A の Philbert が、「第三期の人々に必要なものは、人生や経験を解釈し直すための知識であり、それが、個人の人生だけでなく、コミュニティや人類全体の新たな方向づけや改革につながる」⁵⁰⁾と、新たな知識による解釈のし直しによって、新しい人生、ひいては新たな社会が導かれることを主張し、U3A に教育制度や地域社会全体を変革する可能性を見出している。この80年代におけるフランス U3A の変革論に対し、英国モデルの考案者 Rasllet は、「英国自助モデルの理想主義は80年代の社会にアピールするには有効であったが、90年代における発展はその多元的な発達によるものである。」と、英国での展開を評している。そして、「変革とは擦り切れた言葉であり、ラディカルに新たな教育的プログラムや組織を設立することで社会全体を作り直そうという提起は、古代ギリシャの時代から、効果のないことが繰り返し強調されてきた」⁵¹⁾と、その実践的効果に問いを投げかけることによって、英国 U3A の考え方がフランスの理想主義に追随するものでないことを強調するのである。

D 高齢者教育の方法として

学習実践の方法として両者を比較した場合、フランスモデルの長所としては、一定のレベルが保持され信頼で

きること、短所としては、高齢者のニーズが反映されにくく、表現的欲求が満たされにくいことがあげられる。英国モデルの場合、長所としては、学ぶだけでなく教える、運営するという表現的活動が期待でき、それらを通して協同性や社会性が育成されること、カリキュラム等に柔軟性があることがあげられ、短所としては、提供される内容のレベルや選択肢の幅の問題、安定性や安全性、信頼性の課題があげられよう。しかしながら、個々の支部の抱えるこれらの課題が、ネットワーク化の促進によって超越されつつある。

社会参加や教育の補償の問題に関しては、両者共、教育から離れていた一人暮らしの高齢女性の参加が多いこと、U3A への参加が外部の活動にも興味を発展させるきっかけとなっていること等の報告があることから、U3A はフォーマルな成人教育では得られにくい社会的機能を提供しているといえるが、近年における第三期の人々の教育事情の改善や高学歴化の傾向に伴い、教育機会の補償という意味あいは薄れ、多様な社会参加機会の中の選択肢の一つとしての役割を果たすようになってきたといえる。英国の Withnall と Percy は、高齢者にとって、学習・社会参加の機会に選択の幅のあることとそれについて十分な情報が得られることの重要性を90年代に主張している⁵²⁾。U3A はその選択肢を豊かにする一つの機会として、また、ネットワーク化による選択肢の拡大や高齢者関係の情報のデータベース作り等の近年にみられる挑戦は、現代高齢者の多様な要求に柔軟に応える機関としての自助の潜在的可能性を明示するものであるといえよう。

全国組織に関しては、両者共、U3A フランス国内ユニオン、第三期トラストという組織をもち、理念は掲げつつも地域性や多様性を認めるという姿勢が両国における発展を導いてきた。しかし、このことは反面、支部間のコミュニケーションの希薄さという課題を生じさせているが、英国第三期トラストは、ネットワーク化を促進させることで個々の組織の限界を克服することを目指している。一方、国際組織である U3A 国際協会は、トゥルーズ大学に事務局をおき、国連、ユネスコ、WHO、欧州会議から信任を受ける一つの NGO として活動している。その Jacques 会長もまた、国際協会の役割はネットワーク化と組織の維持や設立の支援にあることを表明しているが、高齢者教育を政治的アジェンダに位置づけ、その地位を向上させていくことへの期待が寄せられている⁵³⁾。

多元性と課題

近年における U3A の多様化とネットワーク化の傾

向は、現代高齢層の学習・社会参加要求の多様化・高度化傾向に応えるために発達した一方で、それが、自助の運営主体としての高齢層の力量の高まりによって齎されているという相互関係が認められる。このように、民間非営利における自助の運営は、学習主体としての高齢層の変化や成熟に伴い、それを運営資源としながら柔軟に展開しようという意味で、様々な経験を蓄積する多様な個人としての性格を主張する現代高齢者が、経験を意味づけ、自己の人生として統合し、高齢者の一人として社会的に協同関係を構築していくための共有しよう一つの有効な方法であるといえよう。

多様な要素が相互に独立し、独自性を保ちつつも相互依存（引き立てあい）を通して統合していく、「多様の中の統一」とも呼べるべき様相を、キャレン（Horace Kallen）は文化的多元性（cultural pluralism）として論じている⁵⁴⁾。個人のレベルにおいては、多様な個人が、学習・文化活動の機会を選択しながら、複数の団体と機能毎に緩やかに繋がっているという、90年代の英国U3Aの調査にみられる現代高齢学習者の在り方は、ここでいう多元性に向かうものといえないだろうか。また、団体のレベルでは、自立的運営によって個々のU3Aの多様化が促進しただけでなく、科目毎、また指導者の役割毎のネットワーク化によって機能的に統合していく90年代にみられるU3Aの重層的な展開もまた、多元的発達と捉えることができよう。このような背景には、高齢者として一様に捉え切れず、社会階層、ジェンダー、エスニシティ等を加味すべき英国社会に特徴的な文化的問題、ひいては個人として独自の文化的アイデンティティを主張するようになった現代高齢層の多様な在り方が推察される。英国の自助の様式にみられる展開は、より敏感に現代の様相を表現していると同時に、それに対応しつつ、社会的力として機能する高齢者教育組織の在り方を提起しているといえよう。

個人としての自律と多様性、多様な集団への機能的、重層的な参加という傾向は、我が国の高齢学習者にもみられる近年の傾向であると考えられるが、それが一個人の中でどのように学習として統合され、高齢期の発達に結びついていくのだろうか。また、依存と衰退の時期である第四期においても可能な学習活動として発展しようのであろうか。

一方、U3Aは趣味や教養中心の学習内容を提供してきたといえるが、日本の退職者においては、資格取得や職業教育への需要も高い。このような点において、正規の教育機関や行政組織との協力関係の作り方によって、U3Aの可能性がより開かれていくことが期待されよう。本論は、仏語の文献に直接当たることができなかったと

いう限界をもち、フランスにみられる、U3Aとフォーマルな組織との協力関係の在り方について、十分深めることができなかった点が残念である。今後の課題としたい。

注

- 1) Swindell, R., & Thompson, J., An International Perspective of the University of the Third Age, *Educational Gerontology*, 21 : 429-447, 1995, p.431
- 2) 調査報告書, *The Carnegie Inquiry into the Third Age, Final Report. Life, Work and Livelihood in the Third Age*, Carnegie United Kingdom Trust, Dunfermline, 1993 を参照のこと。
- 3) Radcliffe, D., The International Perspective for U3As, in Midwinter, E. (ed.), *Mutual Aid Universities*, Croom Helm, London, 1984, pp.61-62.
- 4) Laslett, P., *A Flesh Map of Life*, Harvard University Press, Cambridge, 1991, p.152.
- 5) Groombridge, B., Learning, Education, and Later Life. *Adult Education*, London, 1982, 54, pp.314-325. Swindell, R., & Thompson, J., 前掲書, p 430.
- 6) MacNeil, R., & Teague, M. Aging and leisure : *Vitality in Later Life*, Englewood Cliffs, NJ:Prentice Hall, 1987. Swindell, R., & Thompson, J., 前掲書, p 430.
- 7) Swindell, R., & Thompson, J., 前掲書, p.430.
- 8) 1968年の大学紛争を契機に、フォール文部大臣が高等教育改革のため出した法律、フォール法と呼ばれる。手塚武彦他編、『現代フランスの教育—現状と改革動向』早稲田大学出版部, 1988年
- 9) Sheffield, M., *Third Age-Second Youth, The University of the Third Age*, Post Production Transcript, BBC Open University Production Centre, Walton Hall, Milton Keynes, 1984
- 10) 同上
- 11) Radcliffe, D.,前掲書, pp.62-65
- 12) 同上書 pp.63-64
- 13) Sheffield, M.,前掲書 p 4
- 14) Swindell, R., & Thompson, p.435
Radcriff, D., U3A : *A French model for the later years*, Paper presented at the annual conference of the Comparative and International Education Society, 1982, New York City (ERIC Document Reproduction Service No.ED 228134)
- 15) Radcliffe, D., 前掲書 pp.62-64
- 16) 国際教育辞典, 教育交流社, 1991年, p.614。
また、手塚武彦他編, 前掲(8)。

- 17) Swindell, R., & Thompson, J. 前掲書, pp.442-443.
- 18) Sheffield 前掲書 p 2. p 5
- 19) Philbert, M., *Contemplating the Development of Universities of the Third Age*, in Midwinter, E. (ed.), *Mutual Aid Universities*, Croom Helm, London, 1984, p.50-60.
- 20) *Aging International*, What Motivates Students Attending Universities of the Third Age?, Wasington, D. C.:International Federation on Aging, Vol.8, No.4, 1981, p.5-8.
(仏語原文) Vanbremeersch, M., & Margarido, A., Les Etudiants de l'Université du 3^e Age de l'Université de Picardie, *Gérontologie et Société*, June/July 1980.
- 21) Philbert, M. 前掲書 pp.53-54.
- 22) Sheffield, M. 前掲書 p.14.
- 23) *Aging International* 前掲書 p.5-8,
(仏語原文) Levetautrat, M. & BurasTugendhaft, *Les Etudiants du Troisième Age dans les Universités du Troisième Age-le Club des Retraités MGEN de la Région Parisienne*, January 1981.
- 24) 同上.
- 25) Philbert, M. 前掲書 pp.57-60.
- 26) Swindell, R., & Thompson, J., 前掲 p 432. pp.442-3
- 27) Carnegie UK Trust (英) は、91~93年にわたり英国 U 3 A の全国調査を実施した。前掲 2) 参照
- 28) 拙稿「イギリスの第三期の大学」日本社会教育学会紀要1999年度, No35, p79
Laslett, P., *The Education of the Elderly in Britain*, in Midwinter, E. (ed.), *Mutual Aid Universities*, Croom Helm, London, 1984, pp.20-21. および, Midwinter, E., *Universities of the third Age: The English Version*, in Midwinter, E. (ed.), *Mutual Aid Universities*, Croom Helm, London, 1984, pp.12-14.を参照のこと。
- 29) Rennie, J., Young, M., *Major Influences on U3A Development*, in Midwinter, E. (ed.), *Mutual Aid Universities*, Croom Helm, London, 1984, pp 91-100.
- 30) Norton, D., *U3A Nation Wide*, in Midwinter, E. (ed.), *Mutual Aid Universities*, Croom Helm, London, 1984, pp.108-111.
- 31) 拙稿, 前掲, p81
- 32) Laslett, P., 前掲書, pp.172-174. p.161.
- 33) Allman, P., *Self-Help Learning and Its Relevance for Learning and Development in Later Life*, in Midwinter, E. (ed.), *Mutual Aid Universities*, Croom Helm, London, 1984, pp.12-14.
- 34) Radcliffe, D., 前掲書
- 35) Rennie, J., Young, M. 前掲書
- 36) Norton, D. 前掲書, pp.107-124
- 37) Futerman, V., *Cambridge U3A*, in Midwinter, E. (ed.), *Mutual Aid Universities*, eds. Croom Helm, London, 1984, pp.127-133
- 38) 同上書 pp.132-133
- 39) 同上
- 40) Norton, D. 前掲書, pp.114-120
- 41) Withnall, A., & Percy, K., *U3A York*, in Midwinter, E. (ed.), *Good Practice in the Education and Training of Older Adults*, Department of Continuing Education, Lancaster University, Arena, 1994, pp.115-122.
- 42) Falcon, D., *Educational Opportunities for Retired Adults in a Town in Northern England*, unpublished master's dissertation, Department of Educational Studies, University of York, York 1991.
- 43) Swindell, R., & Thompson, J., p.444-445.
- 44) 拙稿, 前掲, p84.
- 45) Laslett, P., 前掲書 pp.176-177
- 46) Swindell, R., & Thompson, J. 前掲書 p429
- 47) Withnall, A., & Percy, K., *Conclusion*, in Midwinter, E. (ed.), 前掲書, pp.150-160-
- 48) 同上書 p74
- 49) 多元性とは、キャレンによると、多様の中の統一であるという。多元論とは哲学用語であり、世界が唯一の原理からなると考える一元論に対して、相互に独立した複数の原理や価値によって、世界を捉える立場であり、その各要素は、独自性と相互依存(引き立てあい)という特徴をもつのが、多元論の基底的特質である。H. Kallen, 小林哲也, 江渕一公編, 「他民族社会の発展と多文化教育」『多文化教育の比較研究』1993, 九州大学出版会, pp. 14-15参照のこと
- 50) Philbert, M. 前掲書 pp.52-57.
- 51) Laslett, P., 前掲書 4), p 177.
- 52) Withnall, A., & Percy, K., *Concepts of Good Practice*, 前掲書, pp.73-76.
- 53) Swindell, R., & Thompson, J. 前掲書 p 445.
- 54) 49) を参照のこと。